



よみがえる お抱え絵師

京都・妙心寺「退蔵院方丈襖絵プロジェクト」

古都の遺産を食いつぶすだけではなく、豊かな文化を守るために新しいものを創っていかなければ――。

若き副住職と女性画家が呼応し、何かが動き始めた。

写真……古田亮人

二〇二一年六月、静岡県三島市・館澤寺。

薄暗く、雨音以外何も聞こえない禪堂には、修行僧ら二〇人ほどが坐っている。村林由貴はその中に入り、初めて坐禅を体験していた。

足の痛みと腫瘍が、荒波のように襲ってくる。それらを粉らわすために、左手の中指の爪で右手を引っ掻き続けた。爪の食い込んだ赤い跡のみが、生った時間の長さを示すように残っていく。あまりの辛さと自分の不甲斐なさに、悔しさば

かりがとみ上げてくる。

修行は一週間。毎朝三時に起きてから夜九時過ぎに寝るまで、ひたすら読經と坐禅が続く。村林はこの修行に参加するために、京都からやってきていた。

と小さな鐘による終了の合図が道場に着き渡るのを待つて坐り続けた。逃げ出したい。帰りたい。でも、そうはいかない。「自分でやるって決めたんやないか。この修行ができなかったら裸體なんて描き上げられるわけがない。私は絶対に絵を

た。そして猛烈に悔しかった。だからこの日村林は、自分の思いと覚悟のすべてを老師に伝えようと思っていた。

に虎がついてくるかのような迫力で座っている。目は開いているのか閉じているのか分からない。その姿に緊張し、一步一步引いてしまいうなりながらも、彼女は懸命に言葉を継いだ。

「絶対に負けるかと思ひ、一日一日やっています。自分との戦いです。絶対に堪き切ります。そう思つて、痛みに耐えています」

思いが溢れ、涙と鼻水で顔がぐしょぐしょになった。老師は温かな言葉で彼女に応えた。

「人生初めての大舞台だろう。こんなチャンスはめったにないんだ。絵は何百年と残る。自分の分身だ。陣の香りがしてくる絵を描きなさい。そのためにもいま頭振って坐らないといけないよ」

村林は、涙が止まらなくなった。
京都・妙心寺での三年に及ぶプロジェクトが始まってまだ数か月のことである

絵師となった村林由貴は、自分がこれから何をどう描いていくのか、この先にどんな日々が待っているのか、まだ全く見えてはいなかった。

現代の「お抱え絵師」誕生

京都は、いまのままで将来何もなく
なってしまうのではないか――。妙心
寺通戒院の副住職である松山大耕は、い
つしかそんな危機感を持つようになった

松山はまだ三〇代前半の若さ。東京での学生生活と、埼玉県の寺での三年半の修行を終え、生まれ育った退蔵院に戻り

副住職となったのも二〇〇七年と最近だが、観光客であふれかえる京都に久々に暮らし始めると、この町の問題を鋭敏

京都には、年間五〇〇〇万人もの観光客が訪れる。何もしくとも人が来る。しかしそれこそが京都の最大の問題なのではないか。自分たちはいま、何百年も前に祖先様が作ったもので食べさせてもらっているにすぎない。古いものはいつかは朽ちるし、このままでは先の世代

「描き切る。だからいま絶対に足を外したらあかん……」

時に涙を流しながらも、彼女は断えず
そうして一日また一日と過ぎていった。

修行の専門である四日目のこと。龍澤寺の山門の裏の後藤梁山老師に教えを乞う「参拝」の時間がその日もやってきた。村林は、初日に弱音を吐きそうになった自分に対し老舗に言われた言葉がずっと気になっていた。「足が痛いくらいでは死なんわい。いまのままじゃ、生きた絵は描けん」。その通りだと思っ

文化を守っていくためには、自分たち自身が、新しいものを創り残していかなければならないのではないか。松山は、強くそう感じるようになった。

退蔵院は、臨済宗妙心寺派の大本山、妙心寺の塔頭（本山の中にある小寺院の一つ）である。妙心寺は京都市右京区にあり、四六の塔頭と三四〇〇カ寺余りに及ぶ末寺を持つ日本最大の禅寺だ。退蔵院は、その塔頭の中でもひととき大きな存在感を誇っている。

築四〇〇年の重要な文化財である本堂（方丈）。荳野元信によつて枯山水庭園、如拙の代表作「瓢箪図」（国宝）。そして本堂の中には、四〇〇年前の襖絵がある。襖絵は、荳野派の絵師、荳野了庵が描いた山水図で、桃山後期の傑作とされている。ただ、傷みが激しく、本尊を閣下中心經以外のは他の場所での保存を余儀なくされ、部屋的大部分は襖になっている状態となっているのだ。

それならば、その代わりとなる新たな襖を入れることはできないか。何百年の





妙心寺・退蔵院住職の松山太樹。住僧人はまだ30代前半の若さである。

精神のなタフさも強く印象に残る。知っていた。胆に描けること。大。学で村林を教えたことがあった。村林は、大きな花崗に大。木は、村林が、

私がこのプロジェクトの存在を知ったのは、村林由貴が退蔵院に住み込み始めて四ヶ月が経った二〇一一年八月のこと

に取組んでいくこともできる。その立場にあるからこそできることを寺はやっている。いかなければならない。芸術家のパトリックとなつてその時代の最高の芸術を残していることはきつとその一つであり、いまいきも、寺が担わなければならない仕事であるはずだ。松山はそう考える。

は残る機軸を、この時代の最高の芸術を、寺が主体となつて作るのではない。松山は、そう思い至つた。

現代美術家で京都造形芸術大学教授の権井は、松山のアイデアを知つてすぐに機軸を持ち、プロデューサーという立場でプロジェクトに参画することになった。そして松山と権井が中心となつて話し合ひの中で、徐々に構想は具体的になつていった。

「退蔵院方丈後院プロジェクト」その骨格はこう決まった。

絵師は公衆。その条件は次のようにする。絵師制で三年間退蔵院に住み込み、禅や仏教について学びながら六四面の機軸を仕上げる。若くして無名で、京都に縁のある人物であること。

そう決めるに当たつて、松山には思い浮かべていた一つのイメージがあった。それは「お抱え絵師」である。

「お抱え絵師（または御用絵師）」とは一般に、室町時代から江戸時代にかけて大名家などの権力者に雇われ、城や寺社などに絵を描いてきた画家たちを指す。代

表的な存在としては、狩野正信・正徳とされる巨大な絵師集団である狩野派や、日本古来の大和絵を伝承してきたことで知られる土佐派がある。彼らは、時の権力者や寺をパトロンとして、芸術作品を生み出し後世に残してきた。

たえば、妙心寺の見どころの一つでもある法堂の天井に描かれた雲龍図。天井にぐるりと円を描くように描かれた巨大な龍は、見る方向によって天に上るように見える。天から降りてくるように見える。すべての人間を天上から眺めつけるように目を引くこの龍を描いたのは、狩野派を代表する絵師の一人、狩野探幽である。三三〇年前。彼も、妙心寺の塔頭である海福院に住み込んでこの大作を描き上げたのだ。構想三年、制作五年とも言われる。それは寺の力なしにはできなかった仕事だろう。

現代はかつてなかったほど、すぐに結果が求められる時代であり、美術の世界も市場原理に支配されるようになった。だが、寺はその流れから比較的離れたところにいる。何百年というスパンで物事

つていた。権は、彼女なら六四面を描き切ることができるだろうと考えた。

一方村林は、禅も仏教も、何も知らないまま応募した。日本画も水墨画も未経験で、退蔵院がどんな場所なのかもよくわかってはいない。ただ彼女は、自分の描いた絵が六四面の機軸として壮大な規模で立ち上がる瞬間を見たい、それだけを考えていた。

「村林はいま部屋にいます。もうから、ちょっと声をかけてみようか」

退蔵院の本院のすぐ裏手にあるという彼女の部屋に連れて行ってもらった。まだ学生らしさを感ぜさせるにやかな村林が迎えてくれた。村林は、ちょうどここに住みだす直前の三月に本学院を修了したばかり。寺に住み込み、厳しい修行もしながら、一人絵を描いているというのが一目想像できるような、気さくでかわいらしい女性だった。

二階にある六畳の彼女の部屋に入れたら、奥に、画材や荷物が所狭しと置かれていた。奥に描かれた力強い絵が飛び込んできた。

うっすらと茶色く変化した古い機軸には、精緻な線で描かれた白い花が咲いている。その横には、静かに自然の中に行き鳥、



高松院の襖絵に着手した村林由貴。退蔵院では六四四の襖絵を描かねばならぬ。

そして飛立とうと羽を広げるもう一羽の鳥。線は、繊細で豪快だった。

「すこい……」。私は思わず声を出した。襖の上には、村林によって命を与えられた生命体がいまにもそこから抜け出さなばかりに躍っていたのだ。

気がついた。ツバキってこんなにぽんと落ちるのか。牡丹つつつやつやした薄い花びらのな、これはど濃として映くのか……。

「私はこれまで、生の動物物を身近に見ることはあまりありませんでした。絵もインターネットから画像を探してきてそれを見て描くというところばかりで。でもここで毎朝掃除をしていると、木や花が毎日少しずつ変わっていくのが見えてくるのです。こないだ咲いたと思った花がもう枯れる。一日のあいだにも、光の当たり具合によって見え方が全然変わります」

生命が見せる「瞬一瞬の表情」移ろいゆく様子を肌で感ずることは、村林の絵に時間的な奥行きを与えた。そして毎日のそういう積み重ねは、昔の絵師たちがどうやって絵を描いていたのかを想像する力を村林に与えていった。

「たとえば《長谷川》《新幹線》は松林図屏風では、あの松の、さわさわと浮かぶがる感じをうまく描いたのが、体感することであつたような気がしたんで

「この襖は好きに練習していいって言ってもらったので、いまはこの部屋で自由に描いてるんだ」

とにかく彼女は毎日この部屋の襖に向かって描き続けているらしい。三年間住み込んですべてを出し切ろうという覚悟が絵からにみ出していた。その絵を覚悟が、私はこの世がらみそうな女性が内に秘めるものが何なのか、知りたいと思つた。

村林は、一九八六年兵庫県に生まれた。幼いときから絵を描き始め、漫画家を目指していた。その後イラスト、絵画へと軸足を移し、京澤彫形芸術大学に入学する。大学時代は、ビビッドな感情が溢れ出る極彩色の絵を多く描いた。卒業を前に就職活動もしてみたものの、絵を描き続けたいという思いを捨てられず、大学院への進学を決意する。ただ両親には、金銭的な問題もあり、大学行方を反対された。でも村林はあきらめなかった。特待生になつて学費も自分で稼ぐから行かせてください、それができたから

す。夜、霧が深い中で境内を歩いていると、お寺の姿がシルエットだけに見える。等船はきつと、そういうことを外に出て感じて、何度も描いたというんだなつて思つたんです。(伊藤・若冲にしても、何年何年と脚を眺めて、その動きや色や音や臭いのすべてを経験として身体に入れてるから、ああいうものが描けたんだらうなつて。そういう大事なことを、気づけるようになりました」

ちなみに伊藤若冲は、京都・相国寺の権僧・大典と親交を深めたことが絵論として飛躍する大きな契機となつた。若冲は、一七五九年に相国寺派の鹿苑寺(金閣寺)の計五〇面に及ぶ障壁画(襖絵)を依頼され、見事に描き上げるが、驚くべきことにそのとき彼は、絵論としてはまだ全く無名の存在だったのだ。大典の強力な力活えがあつたのころと思われるが、その若冲の様子は、どこか現在の村林に重なるところがあるように感じた。

しかし村林は、過去の絵論について調べて自分と重ねたり、ということには興味がないようだった。描くことにしても

あきらめます。そう食ひ下がった。そして彼女は、必死で絵を描き、日暮待生になる。さらにはコンペで賞金も稼ぎ、自分で学費を払って大学院を修了したのである。学生時代を知る癖は言う。「あれだけタフで根性のある子はめったにない」。絵師を遠ざかした。だから癖は自信を持って彼女を推した。

退蔵院で暮らし出すと、村林はその明るく陽気な性格で、松山の家族、退蔵院のお坊さんたちとすぐ打ち解けていったが、生活に慣れていくことは決して楽なことではなかった。寺のお坊さんも、禅も仏教も退蔵院も、彼女にとっては、すべてが新しい。初めての環境に身体をついていかせるだけで精いっぱいだった。ただ、その生活は、一日一日確実に村林を変えていった。

特に毎朝六時半からの掃除のとき、広い庭を掃きながら、植物の様子や自然と目に入ってくる。大きな池の周りにある牡丹、ツバキ、藤。庭の入口に堂々と立っただけ桜。季節による変化のみならず、それらが一日の中でも姿を変えることに何だとしても、文藝家だから考えるよりも、とにかく目の前にあるものを見つめ続け、動き続けることで何かを得ていく人間なのだ。

「私にとってはいつも経験の方が大事なんです」
その言葉を聞いたとき、私は、村林がいま職絵を描いているのが、妙心寺という禅宗の寺であることが決して偶然ではないように思えた。それは彼女のこの姿勢が、誰の考え方と軌を一にするように見えるからだ。

「これは人作りの現場である」

堀とは何か。村林は退蔵院に来て以来、ずっとそのことを考えてきた。それがわからなければ、自分が何を描くべきなのかは見えてこない。同時にそれは、プロジェクトを外から眺める私たちにとっても同じことである。堀とは何かを考えずしてこのプロジェクトの意味は見えてこない。

仏教界を越えて巨大な足跡を残した仏教者・鈴木大拙は、もはや古典とも言

において、『神と美術』という章をほとんど冒頭とも言える第二章においた。それだけかわりの深い、美術または芸術と神について、彼はこう書く。

「神はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかぬ。神は無道徳であつても、無芸術ではありえない。その理由について、『芸術運動は道徳衝動より原始的であり、生得のものである。芸術の訴える力は端的に人間性に喚び込む。道徳は規範的だが芸術は創造的である』とする。つまり神も芸術も、極めて人間の原始的な生得のものとして結びついているからだと大拙は言うのだ。

神の根本について大拙はこう書く。
「いっさいの皮相な目録を除き去って、仏陀自身の根本精神を教えんというにある。すなわち、仏教の発展とともに肥大化してきたさまざまな儀礼的、教典的なものをすべて排し、仏陀自身が直接体験したことを自らも体験すること、その教えを知るのである。論理や言葉は必要ではない。大事なものは体験だ。神はそう

教える。だからこそ神は修行に重きを置く。ひたすら坐禅を組み、自らと向き合うその直接体験の中から悟りは得られないとするのである。

そういった神の特徴を考えるとき、このプロジェクトが動き出したのも、神宗という背景を抜きには考えられない気がして。神と美術の密接な関係という点でもそうであるが、それ以上に、無名の人間の力を信じ、すべてを託し実践させるというそのコンセプト自体が極めて神祕的なものではなから感ずるのだ。

松山は言う。

「著名な画家に依頼すればもちろんそれなりにいいものはできるでしょう。ただ、このプロジェクトの根幹には、寺が芸術家を育てたということがある。最高の作品を仕上げてもらいたいと同時に、作家自身にもこの経験をきつかけに大きく飛躍してもらいたいです」

ただ技術的に上手い絵を描いてほしいのではなく、一人の人間が三年という期間、神の中を生きて、体得したものを絵にしていこう。そのこと自体に価値がある。

宮本武蔵が住んだ部屋

林は、寺に雇われた絵師であると同時に、複数の師に向き合う一人の修行僧だとも言えるのかもしれない。彼女はいま、絵を描くことを通して、壮大な修行の中を生きているのだ。

宮本武蔵が住んだ部屋

退蔵院は、かつて創家・宮本武蔵が逗留していたことで知られる。彼が退蔵院にいつのくらくら逗留していたのか、詳しいことはわかっていない。ただ一時期、妙心寺の愚堂東覚という高僧に参拝して、その間、まさに村林がいま絵を描くようにしている退蔵院の本堂に住まわせてもらっていたことは確からしい。武蔵もまた神の世界に深く身を投じ、日々坐禅を組みながら剣の道を極めていた。

その武蔵が、死の直前まで熊本の霧隠洞にこもって書いたのが「五輪書」だ。五輪とは、仏教において万物を構成するとされる五つの要素、地・水・火・風・空である。武蔵は、その五つの要素名を冠した五つの巻に、自らが身につけ

た兵法・剣術を書き残した。五輪書を細く解くと、それは本能的には、剣術の技術書であることが分かる。剣の構え方、足の出し方、握線の置き方。そして心の持ち方や、勝つことの意味。あくまでも具体的、自らの強烈な体験に基づいたことを書いている。ただその一つひとつの記述の中に、武蔵の人生観、世界観が読み取れる。

松山は、村林にも、神の空気の中から生まれ出た彼女なりの世界観を、絵と通して描き切つてほしいと思つているのだ。松山は村林に、一つのテーマを与えた。武蔵と退蔵院とのかわりから発想を得たそのテーマは、「五輪」だった。

退蔵院の本堂は、棟によって五つの部屋に分けられるが、その各部屋を、地・水・火・風・空で描き分けてほしい。ここにはないが、北半宙が感じられて、そういった場所になるようなものを描いてほしい。そう松山は、村林に依頼したので。

村林は、このテーマに沿った具体的なモチーフを、自分で探していくことになる。村林にとって武蔵は、これまで特に身

無名な描き手に依頼するリスクはもちろなく覚悟の上で、でも機の上に描き出される絵そのものの価値にとどまらない何か、このプロジェクトから生まれることを松山は信じているのだ。

「松山さんは腹くくつてほしいですよ。たとえ村林が描けずに逃げ出すようなことがあつても、それも受け入れなければならぬ。それが神なんじゃないかな。もちろん、村林がそんなことをしないのはわかるけど。あいつは絵描きやから。根性が違うから」

神は、そう言つて笑つた。

プロジェクトが始まったところからずっと近くで村林を見てきた神僧の古川周賢(現・山梨県恵寿寺副住職)は、このプロジェクトの最大の面白さを「これが人作りの現場であること」だと言つた。

「人ができていく、成長していく現場をぼくらはいま見ているんです。これほど面白いことはない。ここで起きていることは神の道場と同じなんです」

神における師と修行僧の関係が、このプロジェクト内に出来上がっている。村

近存在である。たとえ思えない。ただ村林を知るうちに私は少しづつこの二人が重なって見えるようになっていった。私はあるとき、武蔵の言葉の一つを読んだときとした。彼が死の七日前に書いたとされる、遺言とも言える「獨行道」。そこには彼が生きてる上でもっとも大切にしている一二の事柄が箇条書きにされている。その一つに「我事において後悔をせず」という言葉があるが、それがまさに、村林自身から聞いたばかりの言葉だったのだ。作品について話をしていくとき彼女はこう言つたのだ。「私は、後悔したことはあません」。

「絵に対してはいつも、全力でやつたという確信があります。作品として必ずしも満足しているという意味ではないですけど、そのとき自分の境界までやり切つた、と自信を持つて言える。だから、あとから見て不満な点があつても、後悔はしません。次にそれをどう生かすかだけを考えます」

古川周賢は、ある日、寺の境内の石段に坐つて村林とライターを飲みながら、

彼女にこう言った。「おれは、自分に對して恥ずかしい生き方をしたいと思ってる」と。すると村林はすぐに、そうですと、と、言い、こう応えたという。「私はこれまで、情けなかったり、弱かったり、負けたりすることはありましたが、恥ずかしいと感じる生き方をしたことはないって言い切れます」

やはりこの子はすごい、と、そのとき古川は思った。この子は逃げない人間なんだ、と。それは、京都の大徳寺で二三年に及ぶ修行を続けた古川がたどり着いた極そのものだったのだ。

「自分がこれと決めたら、何がなんでも逃げないでやれ。極のメッセージは、それに尽きるんです。どうすればいいかわからないっていうのは、やってないからです。とにかくやれば、次にやるべきことは絶対に見えてくる。それがわかれば、もう極は終わりなんです。由貴ちゃん、あんたに若いのに、もうそれをわかっている」

「目はわんとしてるが、確かに彼女からはただならぬ情熱と朝氣を感じると

きがある。左手で筆を持ち、絵を描く彼女の姿は、どこか刻を持つ武蔵とも重なるのだ。

「武蔵のように、負けたら本当に殺されるということはないですけれど、でも私の作家としての生命は、この極絵の仕事に懸かっていると思っています」

インドで気づいた描くことの意味

暑い夏が終わり、秋になる。一〇月には村林は再び靜岡の龍潭寺での修行に参加した。初めてだった。六月のときと比べて、學るのは少し楽になった。辛さや痛さ、自分に対する悔しさで涙が出ることはあったけれど、しかし気持ちにはぐっと余裕ができた。六月のときはどうしても緊張がまさってしまっただと老師との対面も、このときは、積極的に会って話したい、と思うようになっていた。五輪について、墨での線の引き方について、老師から数々の言葉をもらい、それらを心の奥にしまひ込んだ。

六月のとき、まだ寺に入らなばかりだという身体の大きな雲水修行僧がいた。

ください、と二つ返事で応えたものの、怖さがあった。人前に出さずの描きだすことがいまの自分にできるのだろうか。しかし、前に進まなければならぬのは明らかだった。ただ村林は、何らかのきっかけを必要としていた。一歩前に踏み出すために後押ししてくれるきっかけを……。

それが見つからぬまま年が明けて二〇一二年になった。すると求めていたものは、思わぬところまでやってきていた。一月末、気分転換もかねて、大学時代の友だちに会うためにインドを訪れた。そのときのことだった――。

マレーシアの空気に慣れ、ほこりっぽさ、クラクションの音。溢れんばかりの人がいる中に、牛が歩き、車が走る……。初めて訪れたインドは、全くの別世界だった。五感のすべてが刺激され、あらゆるものをこつた煮にしたようなその世界に、村林は圧倒された。

友人は、強烈に惹かれていたイ

彼は当時、右も左もわからず、牛糞の雲水たちにながやがや言われ、ときどき叩かれながら、一日一日を必死に過ごしていた。

夜、暗く静まりかえった寺の二室のオレンシエの明かりの中に、怒鳴られる彼のシルエットだけが見えることもあった。まだ坐り慣れていないようだった。彼に、村林は親近感を覚え、その姿が印象に残った。その彼が、一〇月に来てみると、村林の前でビシッと坐り、新たな入った雲水に指示を出している。その様子に村林は感じ入った。時間が経ち、彼は大きく前進した。私もがんばろう。村林はそんなことを思いながら、修行を終えて、再び京都の退蔵院に戻っていった。

そうして秋が過ぎ去ると、早くも二〇一一年の終わりが見えてくる。京都の寒さが少しずつその姿を見せ始める。山から新たな話を持ちかけられたのは、そんなころのことだった。

「退蔵院を描き始める前に、靜閑院の機に描いてみないか？」

靜閑院は、退蔵院から歩いて数分のことにある同じく妙心寺の塔頭の一つ。

インドの地で実際に暮らしながらイラストを描くために、南インドのバンガロールの美大大学院へ留学中だった。彼女も新たな環境で悩みながら自分の表現を探している。英語に加え、カンナダ語という現地の言葉を学びながら彼女は懸命に毎日を生きていた。

その友人とともに、彼女の大学へ行ったある日のこと。友人が所蔵する絵画コースの学生たちと一緒に、大きなキャンバスにみなで好きに絵を描こうということになった。

初対面な上、英語が話せない村林はコミュニケーションでも十分に取れない。そんな状態でどうやって一隅に絵を描くのだろうか戸惑った。でも描いていくうちにだんだんというらんなことが見えてくる。この人はこういう性格なのか。あの子はきつこういう性格なのかではないか。彼女がここが素敵だ。そんな気が持ちはがそれぞれ絵に表れ、いつしか絵が交じりあい、想像もしなかった世界が出来上がっていた。

村林は心から感動した。そしてその絵



まったく新しい「村林の機絵」が立ち上がる――

を見ながら、ふと気がついたのだ。

「私が絵を通してやりたいことってこういうことなんだって、わかったんです。絵を描くことをきつかけにいろんなことや人がつながっていく。そのこと自体がすごく尊い。機軸もきつとそうなんじゃないかなって思ったんです。最高のものを残すために死ぬ気でやるのはもちろんです。でも技術的な面では、正直、水墨画を始めたばかりの自分が、どれだけものを描けるかはわからない。ただ、すべてが初めての経験という中で、自分が悩みながら機軸を描いていくことを通じて、いろんなつながりが生まれていく。そういう過程自体がすごく大事なんだって、思えたんです。そうしたらふと、壽聖院でも描けるような気がしてきて。すごく悔しかったけど、それは私が、形としての結果にこだわらずにしているものではないのか、と。一番大切にしているものがわかったら、悔しがなくなっていくんです」

大きな転機になった。充実感を身体に感じにしみこませ、友人に別れを告げながら、僕は、聞いてみた。プロジェクト開始から一年が経って、筆を描くということについて、どう思うようになったのか、と。すると村林は、流れるように言葉を継いでこう応えた。

「あるときずっと暗に落ち込んでました。筆はそもそも、すでにここにあるはずなんだって。つまり、私がいま、退職院での生活や修行の中で経験していることすべてが、誰の世界で起きていることだよ。見ている自然も、そこに生きている人々も、みな誰の中にある。だから自分がそこから得ているのも、これがどうして描きやないって言えるんだって思っていた。筆をどう描いていくかについて、私なりの思いはある。でも、それを言葉で話し、言葉で限定した瞬間に、違うものになつてしまふ気がします。だから、これが描だ、これは言葉では言えない。でも私は、これが筆ではないはずがない、というこは、はつきりとわかつた気がするんです。そう思ったら吹っ切れました」

自分はいま筆の世界を生きている一人の絵師

で、インドから飛び立った。

そして帰国後、壽聖院の書院の機軸に着手した。一〇畳ほどの部屋が二部屋つながり、大書院は、描くべき機が二五面ほどある。その部屋をアトリエとして、村林の新たな生活が始まった。見せるものを描く覚悟は、まだ揺れ動いていたかもしれない。しかしそれでも大きな一歩を踏み出した。二〇一二年二月のこと。プロジェクトが始まって一〇か月が経っていた。

筆を生きている絵師となる

春。

退職院の庭の大きなしだれ桜は、今年も見事満開となった。それとともに壽聖院の書院には、春をテーマとした四面の機軸が鉤欄に立ち上がった。

桜と、牡丹と、雛と、天女が、あふれんばかりの生命力に満ちた姿で描かれている。冬から春になつていく喜びを描きたかったという村林は、彼女のこの一年間を絵の中に詰め込んだ。

その後、夏をイメージした絵を描き始

めたのだ。その自覚が、言葉の一つひとつにこもっているように私は感じた。

しかし、その後すべてが順調に進んでいるというわけでは決していない。新たな問題が村林の中に宿っていた。注目を集めるようになり、取材依頼が急増し、周囲からの声が彼女に届くようになるにつれて、気持ちのバランスを取ることが難しくなってきたのだ。

それは彼女自身、自分は「絵を描いてなんぼの人間」ということを強く自覚しているからである。プロジェクト自体を広く伝えたいという気持ちはあるし、注目してもらえたいのはありがたい。でもそれによって描くことに集中できなくなる日が続くのが彼女には耐えられなかった。

涙を見せることも少なくなった。彼女が、村林の身近な人に話を聞かされたとき、彼女が、いつに多くの傾けた人たちに見守られていることを私は感じた。

「それがつまり、彼女自身の魅力なんだよ。異口同音にそんな言葉を聞かえてきた。」

めたころには、一年前の絵との違いが明確になっていった。水墨の使い方も、このころには、筆に「筆」ともだいたい打ちかちになってきつたな」と言ってもらえるほど慣れた。昨年、自室の機軸に描いた絵は、線のクリアさや力強さが際立っていたように見えたが、その線がだんだんと淡く柔らくなった。

古川は言う。水墨という画材で勝負をしようとしていることが村林の一番のすごさだ。「自分にとっての最初の大仕事、永遠に残るような仕事を、これまで自分が全く扱ったことのない画材でやることに踏み切れる人はそうはいない。普通ならみな自分の得意なこと、勝負したいはず。でも彼女は得意分野には逃げてこまない。すごい度胸だ。」

それはおそらく村林の絵師としての覚悟のように思う。怖さはある。でも、描くしかない。その緊張感が力に変えることができるのが、彼女の強さなのかもしれない。その強さは彼女の生来のものでもありながら、しかしこの一年、筆と向き合ってきた影響も少なからずあるはず。

多くの師や友人に囲まれながら、村林はすべての思いを筆に込める。気持ちのゆれはもちろんだ。泣きやみもある。泣きたいときには思いきり泣き、涙を拭いてまた描き続ける。ただ、涙が乾いたらにはいづも、彼女は一歩前に進んでいる。そして絵には、新たな生命が吹き込まれる。

プロジェクトの終了予定である二〇一三年秋まではあと一年、壽聖院の書院と本堂を仕上げたのちに、退職院に取材掛かる。時間があるとは決していない。でも筆は言う。「あいつはきつと描き上げる。」

武蔵が命を懸けて戦ったのと同じ気持ちで、村林も作家生命を懸けて取り組んでいる。その結果、どんな機軸が退職院の本堂に立ち上がるのか。それは彼女自身にもわからない。いや、すでに何かが見えてきているのかもしれない。しかしそれは言葉にはしない。

「私にとっては、いま言葉で何を言っても意味がないんです。私の表現は絵です。すべては機軸が完成したときに理解してもらえ。そう思っています」